

## 2025年度大学院博士前期課程一般入学試験（第I期）問題

研究科名	科目名
文学研究科 人文学専攻 哲学歴史学専修	選択問題

---

歴史を専攻する者は、以下から 1 問を選んで論述しなさい。なお、選んだ問題の記号を最初に記すこと。

- A. 1755 年以降、清朝が新疆北部（ジューンガル盆地、準部）においてどのような統治体制を築いたのかを論じなさい。
- B. 辛亥革命により、ハルハ=モンゴル（外モンゴル）、チベット、新疆にどのような変化が起こったのかを論じなさい。

解答または解答例：

Sample Answer(s) or Outline：

【解答例】

A 1755年のジュンガル平定以降、清朝は新疆北部を直轄支配下に組み込み、軍事的色彩の強い統治体制を敷いた。すなわち、内地十八省のような州県制を全面的に敷くことはなく、満洲・オオロト・チャハル・シベ・ソロンの各部隊からなる駐防八旗体制と、モンゴルの首長を旗長（ジャサク）に任命して属民を管理させるジャサク制を併存させる統治体制が築かれた。駐防八旗は単なる守備軍ではなく、屯田経営にも従事した。新疆北部の中心地イリにはイリ将軍が置かれ、駐防八旗を率いるとともに、新疆全体を統括した。一

新疆南部（回部、タリム盆地）では、在地の有カムスリムをベグ（伯克）として官人化するベグ官人制が採用された。ベグとは、オアシス都市社会における在地の有カムスリム層を指し、清朝は彼らを伯克として官人化し、清朝官僚体系の一部に組み込んだ。ベグは清朝から爵位を与えられ、徴税・裁判・行政などを担った。

このように清朝は、新疆北部では八旗制とジャサク制を併用し、南部ではベグ官人制を用いるという地域差をもった多元的統治を展開した。それは軍事的直轄支配と在地勢力の包摂を組み合わせた、清朝帝国統治の典型的な形態であった。

【解答例】

B 1911年の辛亥革命は清朝の崩壊をもたらし、従来「藩部」として統治されてきた周辺地域にも大きな変動を引き起こした。とりわけハルハ＝モンゴル（外モンゴル）、チベット、新疆では、それぞれ異なる形で清朝支配からの離脱や再編が進んだ。

まずハルハ＝モンゴルでは、清朝の瓦解を受けてチベット仏教の高僧ジェプツンダンバ＝ホトクトを君主に擁立し、1911年末に独立を宣言した。ロシア帝国の支援を背景にボグド・ハーン政権が成立し、ハルハは事実上清の支配から離脱した。その後、1915年のキャフタ協定で「自治」が承認されるなど、中国との関係は緩やかな宗主権の枠内で再定義された。

チベットでも、1913年にダライ・ラマ13世が清朝からの独立を宣言した。以後、ラサのチベット政府は独自の統治を行い、事実上の独立状態となった。中華民国はチベットを自国領と主張したが、中央の統制は及ばなかった。

これに対し新疆では、1911年の辛亥革命後も、現地の巡撫や新軍が比較的速やかに中華民国への帰順を表明し、大規模な分離独立運動は生じなかった。楊增新ら漢人官僚が実権を握り、軍閥的な体制のもとで秩序を維持した。

このように辛亥革命は、外モンゴルとチベットでは清朝の宗主権的支配を解体し、事実上の分離をもたらした一方、新疆では省として民国体制に組み込まれる結果となった。周辺地域の帰趨は一様ではなく、清朝の統治形態や国際環境の違いを反映して多様に展開したといえる。

出題意図：

Purpose of Question：

本問題は、清朝の辺疆統治の展開と、その解体過程に関する理解を総合的に問うことを意図している。